

タイトル：「アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に関する人類学的研究」
(平成 20 年度第 3 回研究会)

日時：平成 21 年 1 月 10 日 (土曜日) 午後 1 時半より午後 6 時 場所：AA 研 304 室

報告者名 (所属)：1. 小松かおり (静岡大学/ 人文学部)「バナナの伝播およびスラウェシのバナナ流通における品種の減少」

2. 佐藤靖明 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)：「東アフリカ大湖地方におけるバナナ農耕と商品化の節合をめぐって」

1. 小松かおり 「バナナの伝播およびスラウェシのバナナ流通における品種の減少」

本発表は、バナナの歴史的移動と、現在の流通システムについて報告し、作物からグローバリゼーションについて考えるための資料を提供することを目的とした。

農産物からグローバリゼーションについて考える先行研究としては、ミンツの「甘さと権力」や日本では鶴見良行の「バナナと日本人」を始めとする一連の仕事があり、近年はコーヒーやチョコレートなどの嗜好品に関する著作も多い。バナナは其中で、日常的にグローバルな商品でありつつ、世界各地で地元密着型の栽培・利用システムが非常に多様な形で存在する点でユニークな作物である。

現在の食用バナナは 5 千年から 1 万年前に東南アジアを中心に栽培化されたと考えられる。栄養体繁殖であるため、ごく稀な交雑以外には、突然変異によってのみ異なった株が生まれるのだが、世界中で、共通した、または地域限定の無数の品種を生み出してきた。紀元前にはアフリカに拡がり、15 世紀以前に新大陸を除く熱帯・亜熱帯のほとんどで、主食、軽食、生食、醸造、包装材などの多目的で栽培されていた。次の佐藤報告にある東アフリカの湖岸地帯のように、非常に集約的なバナナ栽培・バナナ食の地域もあり、現在の東南アジアのように軽食用中心に観賞用も兼ねた栽培をする地域もあるが、どこでも 10 以上の品種が存在する。一方、グローバルな作物としてのバナナは、キャベンディッシュというひとつの品種に特化し、単一品種のプランテーション型栽培によって生産される。

大企業によるプランテーション栽培のバナナの流通については、鶴見をはじめ、いくつかの先行研究が存在するが、本報告の後半では、インドネシア・南スラウェシ州における地域内流通を追い、流通の経路と、品種の多様性の関係に関して報告した。地域内のバナナ流通には 3 種類の異なる経路があり、それぞれの経路で、生産者と消費者の距離が異なる。生産者と消費者の物理的・社会的・文化的距離に比例して品種の標準化が進む。標準化は、品種の選別、品種名の統合、品種名の読み替えといったいくつかの方法によって行われる。

国際商品のレベルでの標準化は栽培品種の選択のレベルで起こり、流通・消費の際にはむしろ、差異が強調されるのであるが、地域内流通では、栽培と流通のいくつかの段階で数回にわたって標準化がおこり、消費者のバナナとの関わりのレベルに合わせた「標準型」で提示される。この違いが、商品化の段階の違いによって起こるのか、在来作物が地域内

で商品化するときの特徴なのか、今後の課題として考えたい。

さまざまなグローバル化の視点の中で、農水産物の地域内外での商品化は、農という地域密着性の高い自然—モノ—人関係が拡張したときに起こる関係論の変化について、ミクロなレベルからマクロなレベルまで一望できるという利点がある。中でも在来作物は、品種の多様さという比較基準があるため、栽培法・利用法の多様性と合わせて、多くの視点を提供すると考える。

2. 佐藤靖明 「東アフリカ大湖地方におけるバナナ農耕と商品化の節合をめぐる」

東アフリカ内陸部の大湖周辺には、主食用バナナの栽培を生業基盤とする地域が広く分布している。西洋と初めて接触する 19 世紀後半よりもかなり前からバナナの栽培文化が発達しており、近年、域内流通が活発化するとともに、欧米への輸出が試みられている。また、在来品種や導入品種をめぐる農家、トレーダー、研究者の異質な価値観が交わる問題が起こっている。本発表では、ウガンダでの事例報告をとおしてバナナをめぐるこれらの状況を検討した。

生産地における人とバナナの複雑な関係性は、栽培体系、多目的な利用、品種多様性、多様な認識や分類のありかた、住居を取り囲みバナナを中心に構成されるホームガーデンの形成によく反映されている。とりわけ栽培品種の多様性は、単なる機能的な理由から説明できるものではなく、人びとの認知や分類の発達、社会関係を通じた品種蓄積プロセスなど、さまざまな要素から構成されている。

ウガンダでは、主食用バナナはトウモロコシなどとともに代表的な農産物品目の一つであり、その売買はこれまでほとんど自由主義経済に任せられてきた。1970 年代からの首都の拡大にともない新たな産地が形成されるとともに、多くのアクターを介して都市の商店まで新鮮なうちに運搬される独特な域内流通体制がつくられていった。

ただし農家とトレーダーの間では、バナナの品種に関する認識にずれがみられる。例えば、畑の中では微細な認識や分類がおこなわれるにもかかわらず、商品化される時点では品種名がほとんど言及されず、流通と生産地の品種認識が切り離された状態となる。ただし、いくつかの形態的特徴は価格に現れないニーズとして重視されている。

農家と研究者の間にも認識上の溝がある。例えば、海外で人工的な交雑をとおして開発された品種「FHIA」をめぐるものである。バナナ栽培を重視するウガンダ政府はこの品種の苗を積極的に販売しており、その根拠を収量、病虫への耐性といった特定の機能的利点に置く。しかしその戦略は、食味に対する地域特有の嗜好に配慮したものとなっていない。現在、農家の畑ではこの品種は周辺的な位置づけがなされており、珍奇なものとしてゆっくりと広まっている。

このように近年の状況は、バナナをとおして各農家を越えた地域的な結びつきが強まるとともに、その現象内において、生産地における人とバナナの複雑な関係性が外部の価値観と接触してずれを生じていることが明らかになった。